

香港の永住権を取得するには7年以上連続して駐在していることが必要と言われているが、まさか自分が10年も香港暮らしをすることは思ってもいなかった。いま思い起こすとそれが長い夏の夜の夢だったような、なつかしい記憶に繋がっていく。

香港九龍の1881 Heritage 広場あたりを黒シャツに白のジャケット、レイバーンのサングラスをかけ、貿易風を感じながら歩いていると1920年代に東南アジアで暗躍していた日本のスパイか暗黒世界のボスになったような気分になる。



ギャングの親分気取り

摩天楼の上に四角に切られた青空も少しぼやけてくすんで見える、今日も深センか広州からの空気が流れ込んでいるようだ。そのままブランドショップが続く広東路を西に向ってしばらく歩くと左側にマルコポーロ・プリンスホテル、右側奥には九龍公園と続いていて、香港人と中国人観光客が思い思いに散策している。人の川の流れのようだ。



1881の上層部

その中に忙しくオフィスを目指して足早に行く女性の姿もあるが、雑踏にさえぎられて思うように進めない。そんな今の香港で一世紀前を想像しながらの散歩は愉快だ。

私のアパートは九龍中心街から東に1キロほど離れたホンナム駅近くにある。そこからビクトリアベイに沿って海岸をのんびりと歩くのが休日の過ごし方。

ダウンタウンに向って、左手に香港島のマンション群とビクトリアピークの木々の緑を眺めながら徒歩30分ほどの距離。途中に公園があって、スタープロムナードが工事中の為、期間限定でブルースリーの銅像が仮置きしてある。その横に梅艷芳の像も置かれている。ブロンズ像は大きい、梅艷芳が歌っている姿かたちがうつくしい。それが海の青に映えてあでやかにみえる。

その前で順番に記念写真を撮っている中国人観光客、私も彼らに混じって自撮をする。この公園は高台にあって、そこから湾を行き交う大小の船をながめるのはとても楽しい。時折、観光用と見られる赤い帆をはった大型サイパンもはしっている。それに乗っているのはたいていヨーロッパから来た人たちだろうな……。そんな想像をしながらふたたび目を梅艷芳の像に移す。

梅艷芳、アニタ・ムイは1963年に未だイギリス領であった香港の旺角で生まれ2003年に40歳で病に倒れかえらぬ人となった。18歳でデビューしてから香港のトップシンガーとして活躍を続けた歌手で、今でもブルースリーとならんでレジェンドとして語り継がれている。ブロンズ像があるからレジェンドに違いない。

昨年11月に香港に友人を訪ねた折、写真を撮ったのだが、見当たらない。しょうがない



梅艷芳のブロンズ像

のでネットの写真を借用する。話を面白くしようとすれば、表情は憂いをおびて何か孤高の人を感じさせる。そしてなんだか物悲しいストーリーを伝えるような姿である・・・とするのがいいのだろうけれど。実際の彫刻の姿はりりしくて、まっすぐにステージから客席を見つめて、歌う姿が映されている。

歌に向き合う若くして世を去った歌姫の姿である。彼女は18歳でトップスターとなり、その後の絶頂期には山口百恵のカバーを数多く歌ったことでも知られている。香港のみならず、中国でも高い人気を得ていた。

一説によると「香港の山口百恵」としてうりだしていたという。赤い衝撃は赤的衝撃として、曼珠沙華はそのままのタイトルで広東語で歌われる。私は彼女の曼珠沙華の歌声が大好きで、何度もなんども繰り返し聴いた記憶がある。ファルセットの切ない叫び声が心の糸を振るわせる。そういう糸があることになっているのだ。

他にも山口百恵の「赤」シリーズを歌っていて、独特な節回し演歌風のこぶし、そして時折見せるハスキーな声に世の男達はしびれた。

日本の歌手にもこの歌声に魅せられた男がいた。往年のアイドル M。この男はとんでもないやつで、松田聖子や中森明菜やそのほかのアイドル歌手をもて遊んでいたという。許せない。友達にしてはいけないやつなんだけど、彼が何の縁か、一時期、梅艷芳の恋人であったことは香港人ならみんな知っている。

私にアニタと M の関係を話してくれたのは香港人のケビン君。彼は横浜の中華街でアルバイトをしたこともあり、香港人の常として日本語、英語、広東語、中国普通語に堪能である。香港人は中学から全ての教科を英語で学ぶという超スパルタ教育を受けた特別な人たちなんだ。M とアニタの話はここまで。

「慕情」という香港の女医とアメリカ従軍記者の純愛を描いた映画があったが、エキゾチックなロマンで溢れている。

映画「慕情」ポスター



それはまだ魔の巣窟である九龍城が市内北部に存在していて香港マフィアが跋扈していた時代、イギリス軍も香港警察も手出しが出来なかったあのころのお話。

本物の香港が息づいていたそんな憧れの香港、私にとって夢のような時代にタイムスリップしてみたいくなる。

1997年7月1日に香港はイギリスの抵抗虚しく中国に返還される。

その後は、中国化に向けてまっしぐらに滑り台を滑り降りているように見える。そもそも、香港の租借はアヘン戦争をきっかけにして1898年のイギリスと清朝政府の条約によって99年間の租借が決まった。なぜ永久租借でなく99年だったのかは、時の清朝政府の優秀な外交官の手腕によるものだという

九の発音 jiu そして長い時間を意味する久も同じく jiu と発音する。清朝の外交官は九九とは久久と同じであり、永久に租借できるという意味であると言いくるめたふしがある。イギリス人はその話に乗ってしまったのでしょよね、本来なら永久と書くべき書類に九九と

書いてサインしてしまった。返還までの交渉ではイギリスとしては永久租借すべくスゴークがんばったのだが中国の力による威圧にとうとう負けてしまった。

そもそも香港の飲料水は中国から買っていたので、その蛇口をしめると言われたらもうバンザイするしかない。



九龍公園フラミンゴ

返還の出来事を書いていたときに気になったことが、一帯一路という中国の政策。その一環としてスリランカの港湾開発があった由。中国からの多額の債務に追い詰められたスリランカ政府は南部にあるハンバントタ港の運営権を中国国有企業に99年の期限付で貸し出すはめに。国家にとって重要な港湾施設を事実上中国に取られたことになる。借金のかたに中国がスリランカの港を99年の期限付きで租借。何処かで聞いたような話。

99年と聞いて中国的な考え方の根っこに九九=久久=永久がいまだに存在することにある種の感動を覚えた。現代でも中国5000年の歴史がうごめいて政治を動かしている様は、変わらない中国の歴史の大河を感じずにいられない。



ビクトリア・ベイ

その中に私のいきつけのCDショップがあった。名前を香港レコードという。ここはHMVやほかのCDショップとはまた一味違ったローカル色の強いコレクションを持っていた。クラシックでは香港に拠点を持つNAXOSのコレクションが充実していて、しかも価格もDGなんかと比べて安い。展示棚のかなりのスペースをさいていて、しかも新譜はクラシクルームの入口に近い場所にコーナーがあり、時のたつのも忘れるほど。

香港ブランドであるNAXOSは新進気鋭の演奏家を発掘することと斬新な曲目の組み合わせに特色があった様に記憶している。香港レコードの二つ目の特色は日本人歌手のCDコーナーが設けられていたことで、山口百恵、西城秀樹、キャンディーズなどなど割とオーソドックスなラインアップで、中には香港や台湾でつくられたCDもあった。これは日本からの輸入盤に比べて半分くらいの値段で売られていて帯には日本製と同じ内容だが、東南アジアでの販売に限ると書かれていた。

そういう雑然としたところや混沌としたところが東南アジアの魅力であり香港らしさなんだね。何でもありみたいなところ。

もともと、香港から電車で40分ほどの隣町深センに出張で出かけると、そのあたりの状況がもっともっとDeepでごちゃごちゃの世界になっている。善悪、騙し騙され、本物偽物が混じり合ったカオスが広がる。どちらかというと正義じゃないカオス状態。深センはあまりに人が多いものだから、全ての価値基準が毛沢東が印刷されている赤い百元札だ

けと言う解り易いものになっている。

私はこのお札と価値観を「紅色的毛沢東」と呼んで揶揄しているのだが深センの人たちに限らず、中国人の紅色的毛沢東への執着は日本人の福沢諭吉のそれと較べて何倍も強いものがある。

紅色的毛沢東の発音はホンスーダマオツントンだろうと勝手に決め込んでいるが多分違うんだらうね。中国語の pinyin も少しかじったけれど努力もせず、才能もなく、私の発音では「ニイハオ」が「コンニーチワー」と聞こえていたようでさっぱり通用しなかった、それで10年間おし通した。国際ビジネスマンを標榜していたが、実にいい加減でお恥ずかしい限り。そういったいい加減さが香港や深センあたりを覆っている空気なんだと思いつつ生活していました。

上海のおもしろ話もいくつかあるがまたの機会に。CDに話を戻そう。

海港城の香港レコードでの一番の楽しみは私の趣味であるテレサ・テンのCDを一枚、またいちまいと探してコレクションすること。

いつ行っても常に新しい復刻版が出ていて、たいていは中国語のCDなんだけれども、たまに日本語盤もあって、そういうのはびっくりのハイプライスで売られている。ジャケットデザインを楽しみながら品定めするのはとても気分のいいものでこれまた至福のひとつときである。



テレサ・テン

そうこうして、お気に入りの一枚を手に入れる、VIP会員なので何がしかの割引で購入できるのでちょっぴりだが優越感に浸れる。

こんな感じでテレサ・テンのコレクションをしていたので、いつのまにかわけのわからん芝居のシーンの録音だったり、本人かどうか不明だったり、重複のじゅうふくだったり残念なコレクションに変貌してきた。

目的が終わるとペニンシュラホテルまで歩いて、アパートの送迎バスに乗って帰る。嵐の日は間引き運転でそんなときはホテルのロビーで宿泊客のふりをして過ごしたりする。

最後に住んでいたアパートは不動産王李様の持ち物で、ビクトリア湾に面した広い窓からは、たくさんの船の往来が見えるし、夜は対岸の香港島のマンション群の灯りやビクトリアピークのライトアップされたビルがみえて飽きることは無い。



ザ・アーチ

2LDKの部屋は香港では割と広い部類に入ると思うのだが。最初は香港島の歌舞伎町、銅鑼湾エリアにある全面ガラス張りのアパートに住んでいた。

二番目は空港行きのエクスプレス駅があるエレメンツショッピングセンターにあるアーチ「凱旋門」と呼ばれるアパートに住んだ。アーチは投資用のマンションで小さい部屋で1億円くらいと不動産屋にいわれたけれど、部屋はせまくて使い勝手が悪い、その一方でエントランスに豪華なシャンデリア、通年使える20メートルほどの温水プール、ジャグジ、喫茶室や図書館まであった。

ここに2年暮らしたが、前述のケビン君からアーチは贅沢、身の丈にあったアパートに引っ越すように指導があり九龍の東側にあたるホンハムに移った。香港に赴任当時、しばら

くホテルにいたので、これで四度目の引越。日通の引越しのお兄ちゃんとも顔なじみになってしまった。

引越した結果は大正解、オーディオルームとして私を満足させる物件だった。李様が所有するこのアパートはホイワンヒンという名前で、近くに少し発音が違うホイワンヒン「こっちはヒンの部分を馬のいななきの様に発音する」があり、タクシーで別のマンションに連れて行かれることもしばしばあった。

例によって、私の発音の問題でタクシー運転手に何度注意されたことか。しばらくしてマンションの名前を漢字で書いたカードを運転手に見せるようにしてから間違いはなくなった。自分に情けない一方、漢字文化にととても感謝している。

ここで脱線、たいていの出張者は上海のカラオケ倶楽部で女性を誘うとき筆談で会話するのだが、これが結構通じるから面白い。遣隋使や遣唐使も使ったであろうノウハウがこれまた現代に生きているのだ。 わっはっは。

このホイワンヒンの部屋からビクトリア湾を走る船を見ながら音楽を聴くという至福の何年かを過ごすことができたのはとても幸運でしたね。ジンジャエールの泡の向こうを貨物船が通りすぎるのです。



マーチンローガンを窓の両側に置き、パイオニアのユニバーサルプレーヤーからマランツのAVアンプに接続してCDとDVDを5.1chで楽しんでいました。サラ・ブライトマンと川井郁子がお気に入り、そこに中森明菜が加わる。休日はサンミゲルを飲みながらくたっと日がな一日のんびり過ごしていました。

歌謡曲も大好きで、船を眺めながらの演歌は日本への望郷を募らせるのに申し分ない仕掛けでした。どうやら、この頃からクラシックよりも演歌をトスカニーニよりテレサ・テンを聴くことが多くなった様な気がします。

マーチンローガン

一方で、ブリリアント社が先鞭をつけたクラシックのボックス化がブームとなり、モーツァルトやバッハ全集から始まり、指揮者シリーズではカラヤン、デュトワ、シヨルティと大人買いをスタート。モーツァルト全集ではピアノ協奏曲でノイズのおまけ付き。CDケースが床に散らばりモザイク模様になったので、IKEAでCDタワーラックを一本また一本と購入し、それを居間に持ち込んで床に散らばったCDをせっせと詰め込んだ。

最期にはCDタワーが8本ならんでそこだけマンハッタン状態だったが、いまではほとんどのCDとDVDは長野の実家のダンボールの中で眠っている。

香港で使っていたオーディオ機材は220V対応だったので全て友達にゆずり、唯一マーチンローガンだけ日本に持ち帰った。このアメリカ製のスピーカーだけが香港に住んでいたことの証。

その時々ノウハウや文化があって、失われたものがあるそれが私のパラダイムシフト。相変わらず大げさだ。

10年ほど前は、まだ元気で退職後は長野の実家でジャガイモでも掘りながら音楽三昧の

日々を夢見ていたが、2年前に香港から帰国して定年退職してからというもの、そんな気持ちは何処吹く風、心は豹変しその場しのぎの性格が頭をもたげ、田舎暮らしの話は元々無かったことに。今は柏の羽黒台で天から貸与された6畳のベッドルームに全てのオーディオ機材を持ち込みベッドの上で音場のスイートスポットを探す日々。



実家はこの辺り

そんな中で今年6月、アビスタで本を借りての帰り道、偶然宇多さんのジャズを聴く会の案内を見つけ、それをきっかけにA A F Cに入会することになりました。こんな幸運ってあるんですね。神様に感謝。

当初は今使っているP Cオーディオシステムについて書くつもりで途中まで原稿を進めていたが、配置や配線をお絵かきソフトで描こうとして背伸びしたことが災いし、W A C O Mを使いこなせず、あえなく断念。次回機会があれば、リベンジしたいと思っています。最後まで読んでくださりありがとうございました。



《 資料 》

アニタ・ムイ 梅艷芳 ANITA MUI 1963-2003 香港の永遠の歌姫
テレサ・テン 鄧麗君 DENG LIJUN 1953-1995 アジアの歌姫



我孫子オーディオファンクラブ

<http://www.aafc.jp/> 2018年12月号
編集責任者 倉田勲 / 編集 大久保貴枝子